

平成23年度第1回入学試験問題

国

語

「始め」の合図があるまでは問題を開いてはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから7ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎかつこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

【一】次のA・Bの文章を読んで、後の問に答えなさい。

A 豆腐の角はいくつ？

短歌を作ってみようかどうか迷っている人を前にして、歌人がよく言う励まし（はげ）の言葉に、「大丈夫よ、見たまま感じたままを表現すればいいんだから」というのがあります。思い返せば、私も何度か口にした記憶があります。でも、あるときふと、「見たまま感じたまま」って本当はどういうことなのだろう、と疑問を感じてしまいました。だいたい、一息に「見たまま感じたまま」と言いますが、1「見たまま」と「感じたまま」では天と地ほどの隔（へだ）たりがあるのではないのでしょうか。たとえば、次のような歌があります。

冷水に八つの角の冴えざえと豆腐がありぬ朝の厨に

吉川喜代美『風の指紋』

厨は台所のことです。ボウルの中の冷水に豆腐がひたされています。朝のさわやかさと豆腐の白さが「コウ」して、すがすがしい印象を与える歌です。

私は、たまたまこの『風の指紋』という歌集について批評を交わす会に出席していました。そのとき、ある人から、

「豆腐は水に入っているのに、どうして角が八つ見えたのですか。せいぜい四つか五つしか見えな

いと思いますか……」

という質問が出ました。

なるほど。一番奥の角はどうしても見えません。指摘されるまで私は気が付きませんでした。直方体だから角は八つ、と頭の中で思い描いて、何の疑問も持たずに読んでいたのです。ひよつとして作者も実物をよく見ずに想像だけでうたったのかな、とチラリと思いました。ところが、作者は、

「いいえ、八つ見えました。実物をちゃんと見て作った歌ですが、私には角は八つ見えました」と

と明言したのでした。その後、私たちの間でしばし意見が飛び交いました。そして最終的に、私は「角は八つでいいんだ」と納得するにいたしました。物理的には八つは見えないかもしれない。でも、朝の光に包まれて冴えざえと冷えている豆腐を目にしたとき、作者は一瞬、見えないはずの角まで透視（とうし）できてしまったのではないのでしょうか。そう考えたのです。そう解釈した方が、この歌はずっとすぐれた作品になります。

冷水に四つの角の冴えざえと豆腐がありぬ朝の厨に

では、単に「事実」を写し取っただけの短歌です。「見たまま」の歌と言えます。でも、

冷水に八つの角の冴えざえと豆腐がありぬ朝の厨に

とすると、これは「真実」をつかみ取った短歌になっていると思います。「見たまま」に「感じたまま」というプラスアルファが付いて、この日この時この作者にしか作れなかった一首へと変貌（へんぼう）しています。事実をきちんと踏まえてうたうことはもちろん大切ですが、その上でさらにもう一步対象に詰め寄（よ）って、真実とじかに向き合おうと努めること——それが結果的に作品に臨場感をもたらしすることになる

だと言えます。

B 超能力者になったつもりで

絵画には具象画（ぐしやうが）と抽象画（ちゆうしやうが）というジャンルの区別があります。具象画を描くことを写生とも言いま

す。写生による絵画と、抽象画との間に、優劣（ゆうりつ）の差はありません。写生であっても抽象画であっても、

優れた作品だけが人の心を打ちます。

短歌においても同じです。見たこと、聞いたこと、触れてみたことを言葉で正確に写し取ることは、けつして無駄な行為ではありません。歌の素材は身の回りにいくつも散らばっています。それらを無駄な眼差しで観察し直すところから、発見の輝きは生まれ出てきます。

ただ、短歌の場合はかたちが短いため、漫然と体験をうたっただけでは、断片的な状況報告に終わってしまいがちです。自分だけのメモのつもりでうたうならばそれでよいのですが、何といっても作品は第三者に読んでもらってこそ命が吹き込まれます。せつかく他者の目に触れても、「ああ、そうですか」だけで通りすぎてしまわれては、やはり寂しいですね。

そこで「日常の報告」を脱して、「非日常の冒険」へと少しからだをずらすことを考えてみましょう。

新宿駅西口コインロッカーの中のひとつは海の音する

山田富士郎『アビー・ロードを夢みて』

学校のトイレにはお化けがいる、という怪談話がしばらく前に流行ったことがありました。この歌はそれと似ていますが、こちらの方がずっとはるばるとしていて、どこか切ない気分さえ感じさせます。

終日群衆でごった返す新宿駅西口。無愛想に並ぶコインロッカーはいつも満杯です。赤ちゃんの死体が入れられていた、などという残忍な出来事があつたせいか、コインロッカーには冷たく無機質なイメージがつきまとっています。

でも、作者は西口に何百とあるコインロッカーの中のどれか一つからは、きっと海の音がするはずだ、と信じています。いや、「海の音する」ときっぱり言い切っている以上、海の音をすでに聴いたに違いありません。大都会のコインロッカーの奥に海に通じる道があるなら、どんなに素敵なことでしょう。今度コインロッカーの前を通りかかったら耳を澄ませてみてください。（中略）

夜ざくらを見つつ思ほゆ人の世に暗くただ一つある（非常口）

高野公彦『雨月』

「夜ざくらを見つつ思ほゆ」の「思ほゆ」は「自然に思われてくる」というほどの意味です。

皆さんはこの歌をどう解釈しますか。ちよつと難しいかもしれませんが、夜桜見物と非常口といったいどんな関係があるんだ？と、首を傾げていませんか。別に、夜桜の咲く公園のそばにビルの非常口が灯っているわけではありません。（非常口）という語に掛かる「人の世に暗くただ一つある」という修飾語に注目してみてください。人の世とは、いま私たちが生きている現実の世界のことです。ならば、この現世から出てゆくためのたった一つの非常口といったら——そう、それは「死」に他なりません。

闇を背にして咲き誇る夜桜を見ていると、作者は桜に A 衝動を覚えたのでしょうか。夜桜の奥には妖しい空間が広がっているような、その空間にひとたび足を踏み入れたら二度とは戻って来られないような、そんな危険な魅力に胸が騒いだのだと思います。

生と死の境目というものは、このように思いがけないものの背後にひそんでいるのかもしれない。「暗くただ一つある（非常口）」とうたったとき、作者は明らかに非日常の領域に半身を B アズけています。

次は動物の歌を読んでみましょう。

日のくれに帰れる犬の身顫ひて遠き沙漠の砂撒き散らす

大西民子『花溢れぬき』

夕方帰ってきて、身顫いしながら体の砂を撒き散らす犬。

飼犬の何気ない動作をうたっていますが、4「沙漠」という語によって、一気に歌に生彩が加わりました。犬はどこまで遊びに行ってきたのでしょうか。沙漠まで行くはずはないのですが、「遠き沙漠の砂」と表わしたことで、歌の場面からロマンと冒険の香りがフワッと立ちのぼってくるではありませんか。

遠い沙漠の砂は、不思議な魔法で、作者のみならず読者の私たちまでも、はるかな世界へと連れ

山田富士郎や高野公彦や大西民子の短歌を読むと、彼らは透視能力や千里眼の持ち主だなあ、と感心してしまいます。理屈で考えるのではなく、B対象に迫^{せま}っているからこそ、超能力者顔負けの表現を手に入れることができたのでしょう。

（栗木京子『短歌を楽しむ』より）

に迫^{せま}っているからこそ、超能力者
(栗木京子『短歌を楽しむ』より)

B

にあて

1001

「切ない気分」

に、人々が忙
おおうなばら
大海原

人々が忙しく行き交う大都会の駅、冷たく無
大海原の音を早く聞きたいと耳を澄ましていて

人々が忙しく行き交う大都会の駅、日常生活に疲れた人々が、大海原へと通じる道があつてほしいと願つてゐるところ。

人々が忙しく行き交う大都會の駅、殺風景に味気なく並ぶコ
に、大海原へと通じる道が広がっていると想像しているところ。

A

ア
心躍る

イ
目を見張る

工
手招きされる

ア 客観性を追い求めて

イ 感受性を研ぎ澄まして

——線4 『沙漠』という語によつて、一気に歌に生彩が加わりました」とありますが、これは

「沙漠」という語を用いることで、現実にはありえない甘美な夢や楽しい遊び心を読者に抱か

「沙漠」という語を用いることで、遙かな世界に思いをはせる人々に大きな夢と新たな希望を

「沙漠」という語を用いることで、無邪気に遊び回る犬の愛くるしい姿とすがすがしさを読者

「沙漠」という語を用いることで、自由の身となる喜びと未知の世界に飛び込むとする勇氣

「二」次の文章は柳月美智子の小説『しずかな日々』の一節です。

小学五年生の「ぼく」は「母さん」と離れ、「おじいさん」と「おじいさん」の家で二人暮らしを始めた。十日後、「ぼく」の誕生日に、「母さん」がはじめてその家にやってくるようになったのです。これに続く次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「今日は伸子が来るらしいぞ」
え？

おじいさんは、ぎゅつとひとつ笑って、そのまま行ってしまった。
母さんが来る。母さんがこの家に来るんだ。ぼくは純粋にうれしかった。おじいさんのうちに引越してから、まだ間もなかったから、それほどの恋しさはなかったけど、母さんに会えるのはやっぱりうれしかった。

母さんと離れて暮らすことにたくさんさんの心配はあったけど、思っていたよりも気持ちは落ち着いていたし、不安に思うこともほとんどなかった。母さんがここにいてくれれば、と思うことはあったけど、ついにないだまでの母さんとの二人きりの生活に戻りたいとは思わなかった。

ぼくは自分で意識しないうちに、おじいさんという、母さん以外の身内の存在をとても心強く感じていた。母さんがいなくなったらどうしよう、というぼくの最大の心配事は「紀要」だった。ぼくにはおじいさんがいた。そして、今は離れているけど母さんもいるのだ。二人いれば大丈夫なんだ、という根拠のない自信はぼくを元気にさせてくれた。

「行ってくる」

と言って、おじいさんが仕事に行ったあと、ぼくはいつものように廊下の雑巾がけをはじめた。今日も暑くなりそうだなと思う。

誕生日。毎年思うことだけど、ぼくが八月一日生まれというのはまるで似合わないような気がする。夏の誕生日の子たちは、明るくて元気で活発というイメージだ。

ギイという耳慣れた音がした。ぼくは高い位置にあった腰を落とし、正座のような格好になって、木戸のほうを見た。黒い日傘をすぼめ、少しかがんでその人は入ってきた。

「光輝」

母さんだった。

このときの場面を、ぼくはとても鮮明に覚えている。映画かなにかのワンシーンを見ているように、ぼくは、ぼくを含めた広縁と庭と木戸と母さんを、少し離れた場所から、静かな気持ちで眺めていた。

「陽に焼けたわね」

ぼくを見て、母さんは笑った。ぼくの心の中はとても静かだった。まだほんのわずかの日数だけど、母さんと離れて暮らしたのははじめてだったし、生まれてこのかた、よその家に泊まったことすらなかった。それなのに、久しぶりに会った母さんを見ても、ぼくの心はなぜか静かだった。

「元気にしてる？」

母さんは広縁に腰かけて、折りたたみ式の日傘を丁寧にたたみはじめた。なんだかちがう人みたいだった。母さんはぼくの知らない白いワンピースを着て、ぼくの知らない白いサンダルをはいていた。

「うん」

と返事をして、ぼくの心はひんやりとした。ぼくの考えていた再会（といっ）ってはおおげさだけどとちがっていた。ちがっていたのはぼくの気持ちで、ぼくはもつと喜んでうれしがるはずなのに、と残念に思った。

「母さんは元気だった？」

「うん、まあまあかな」

と、ここではじめてお互いの目を合わせたと思う。「麦茶をいれてくる」と言って、ぼくは手に持っていた雑巾を片付け、台所へ行った。涼しい家の中から、縁側に座っている母さんのうしろ姿を見ると、それこそ、ぜんぜん知らない人に見えた。

「はい」

お盆に載せたふたつのコップから、母さんはひとつを手にとって、そつと口をつけた。

「ああ、おいしいわ。ありがとう」

ぼくも飲んだ。すっかりこの麦茶の味に慣れてしまった。母さんと二人で住んでいたときの麦茶の味はもう思い出せなかった。

「この暮らしはどう？」

いつのまにか、手を膝に置いて正座をしていた自分に気付いて、ぼくはそそくさと縁側に足を下ろした。

「うん、たのしいよ」

「おじいさんはよくしてくれる？」

「うん」

そう、よかった、と母さんは言った。

「母さんのほうは？ 仕事はどう？ みどりさんは？ 新しい家は？」

矢継ぎ早に聞いてしまつて、これじゃあ、2 ぼくの気持ちとうらはらだ、と思った。けれど、母さんの新しい仕事のことは、頭のどこかでずつと気にかかつていた。母さんの引越先にもぼくは行っていないから、どんな生活をしているのか、時々考えることはあった。

「仕事のほうはまだ準備段階かなあ。いろいろな準備をして、自分でもいろんな勉強をしているの。お客様がつくのは時間がかかるわ。」

みどりさんは、とてもよくしてくれるのよ。彼女がいなかったら、私一人ではなにもできなかったわ。みどりさんと、新しい住まいに一緒に住むことになったの。下がお店だから、ちよいどいいのよ。広いから光輝もいくらだって泊まりに来られるわ。

今はまだ荷物が片付いてないんだけど、あと一週間もすればきちんと片付くし、光輝の部屋も用意してあるの。みどりさんも会いたがつていたから、いつでも来てね。電話もひいたから、いつでもすぐに電話しなさいね」

母さんの話し方は、ひどくゆつくりだった。言葉ひとつひとつを言い含めるようにゆつくりとしゃべった。もとから静かに話す人だったけど、前とはちがう。頭の中の大事な部品のひとつが消えてなくなつて、その代わりに形も材質も機能もまったく異なる部品が、聞いたこともない製造元から搬入されたみたいだった。

3 その部品に名前をつけるとしたら『現実』と『妄想』だろうな、とぼくは大人になつてから思いあたつた。けれど、十一歳になりたてのぼくには、それがなんなのか、もちろんわからなかった。

「これ、ケーキ。すぐおいしいうて評判のお店で買つてきたのよ。あとで食べましょう」

ぼくは母さんからケーキを受け取り、当然のようにそれを冷蔵庫にしまった。冷蔵庫の中はケーキの箱を入れる隙間がなかったから、ぼくは、ラップがかかっている漬物やハムのお皿をどけて、瓶詰のらっきようや紅しょうがを整理して、納豆のパックを横にやつて、ケーキのためのスペースを作つた。その作業をしながらなんとなく違和感が残つた。その違和感に気付いたのは、おじいさんが帰つてきてからだつた。

「ただいま」

おじいさんは昼過ぎに帰つてきた。母さんを見て、眉毛を一瞬だけぴくつとさせ、「ああ」と言った。

「おじやましてます」

母さんはゆつくりとした動作で頭を下げた。ん？ と思つた。おじやましてます？

ああ、そうか。ようやく4 合点がいった。母さんはこのうちの人ではないんだ、と。そして、ぼくはこのうちの子になつたんだと。このうちの子だから、5 お客さんには麦茶を出すし、お客さんから頂いたケーキは冷蔵庫内にしまふ。お客さんだから、「おじやましてます」と言うのだと。

ぼくはそれを当然のように受け入れている自分が不思議だった。たったこれだけの期間で、ぼくはもうこのうちの子になつてしまつたんだ、と複雑な気持ちだった。

「ほら、これ」

おじいさんは大きな紙袋を持っていて、それをぼくに差し出した。中身を見ると、それは水槽だった。酸素のセットも入っている。

「佐々木さんのとこの息子さんが昔使っていた水槽だけど、ほんの少しの間しか使わなかったみたいだから新品同様だよ。これに子どもを入れたらいい」

子どもというのがグッピーの赤ちゃんだとわかるまで数秒かかつて、この水槽が誕生日プレゼントとわかるまでさらに数十秒かかった。

「どうもありがとう」

ちようどメスのグッピーのお腹が大きくなっている。明日かあさつてには赤ちゃんが生まれそうだよ。どうやって親から隔離するか、考えていた矢先だった。魚すくいのアミを水槽に入れて、その中で赤ちゃんを飼おうかな、なんて思っていた。

「さつそく使います。おじいさん、ありがとう」

紙袋から水槽を取り出し、外で丁寧に洗つた。水をためて酸素ポンプも試してみたけど、なんの問題もなかった。水槽は本当にまだ新品で、外側にはネオンテトラと水藻の写真のシールが貼つたままだつた。

水槽に井戸水を入れて、外に出しておいた。水道水じゃないから大丈夫だろうけど、念のために日干しすることにした。

水槽を洗っている間に、ちらりと母さんのほうを見た。おじいさんにb倒されて、ようやくといった感じで、中に入るのが見えた。縁側で二人でただ座っていても、ぼくはどうしたらいいのかわからなかった。一緒に住んでいるときだって、特別な話をするわけではなかったけど、今の状況で二人きりになるのとはちがって、それは毎日の生活の中でのごくごく自然のことだった。けれど、今はもうちがうみたいだった。間がもたないような感じがした。たった十日しかたっていないのに。

母さんの雰囲気(ふんいき)が前と変わったことが原因かもしれない。6それともぼくのほうが変わってしまったのかもしれない。ぼくは大汗をかきながら、水槽をこしこしと洗った。鼻の下の汗の粒(つぶ)を舌でなめた。しょっぱい味がした。

問1 —— 線aのカタカナを漢字に直し、—— 線bの漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問2 「おじいさん」との十日間の生活を経て、「ぼく」は「おじいさん」をどう思うようになりましたか。解答欄に合うように、文中のことばを用いて五字以内で答えなさい。

問3 ①—— 線1「杞憂(きゆう)」ということばの使い方として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 空がくもってきたので、雨が降る杞憂があった。
- イ 彼のうしろ向きな性格は、もともと杞憂に過ぎない。
- ウ 事故にあつたかと思つたが、それは杞憂に終わった。
- エ 景気は良くないが、日本人は杞憂で乗り越えるだろう。

②—— 線4「合点(がてん)がいった」の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 何かがひらめいた。
- イ あきらめがついた。
- ウ 満足する結論が出た。
- エ 理屈をよく理解した。

問4 —— 線2「ぼくの気持ち」とはどのような気持ちですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 再会の喜びを表現したくてもできないもどかしい気持ち。
- イ 自分と母親の心の隔(へだ)たりをなんとかしなければという気持ち。
- ウ 母親と再会しても揺れ動くことのなかった、妙に冷静な気持ち。
- エ 自分の心の動きが自分でもよくわからなくて、とまどう気持ち。

問5 —— 線3以外にも、この文章が大人になった「ぼく」によって語られていることがよくわかる一段落があります。その段落を—— 線3より前から探し、最初の五字を書き抜きなさい。

問6 —— 線5にある二つの動作に、僕は当初違和感を感じていました。これ以外にも、「ぼく」が違和感を覚えた自分の動作が書かれている一文があります。それを—— 線3より前から探し、最初の五字を書き抜きなさい。

問7 —— 線6「それともぼくのほうが変わってしまったのかもしれない」とありますが、「ぼく」はたった十日間で自分がどのように変わったかと思つていますか。次のことばを必ず用いて、解答欄に合うように十五字以上二十字以内で答えなさい。

母さん

合 計	

小計	
----	--

小計	
----	--

解答用紙

a
b
け

5	
0	

問 4

A
B

問
6

a
b
され

「おじいさん」を

--	--	--	--

だと思うようになった。

問 4

問 6

[illegible]

ようになった。